

翻刻「狂俳水の音」序（初編から十六編・四十一編）

富田 和子

キーワード：□狂俳 □明治期 □名古屋文化

はじめに

名古屋の狂俳界は、明治十二（一八七九）年三月「狂俳名吟新誌」（松風社刊）創刊^①以後、月次集の創刊が続き、第二次隆盛期を迎える。この風潮の中、芭蕉の「古池や」の句から「水の音」を社名とした水音社が設立した。これによって、同十五年に名古屋で創刊された狂俳雑誌が、本稿で取り上げる「水の音」（月次集、淇水堂刊）である。本書はその後、角書に変遷はあるが、ほぼ毎月一回、少なくとも大正五（一九一六）年頃発行の三〇六編^②まで、三十五年間続き、名古屋の狂俳活動の中心的存在であった^③。

いまだすべてを見てはいないが、見ることできた中で、初編から十六編（同十六年九月）まで（十三編序は未見。欠丁か）と四十一編（同十八年十月）に、撰者たちが順に序を付している。他に、五十編から五十二編、五十四編・五十五編で多桜子による「俳諧冠句の履歴」を連載するし、六十四編では「俳諧単句改良緒言」^④を掲載する。このように、初期の雑誌には、上位句を掲載するだけでなく序が付され、撰者たちの意気込みが感じられた。

ところで、先に「名古屋『雅風教会規約』にみる教導職制度の影響」（『椋山国文学』33）をまとめ、そこから伝統の意識と革新の意欲がみてとれた。それは、明治期の東海地方の俳壇では、教導職制度を取り込み活用して、勢力の拡大をはかりながら、蕉風俳諧の伝統を受け継ぐ意識と、蕉風とはひと味違った独自の俳諧をめざす革新の意欲

が共存したことを論じた。その雅風教会は、明治二十年に「水の音」の撰者たちによって設立することになる。

そこで、本稿では、初編から十六編までの序と四十一編序を翻刻紹介し、販売書店一覧、撰者各員録を末尾にまとめて紹介したい。

なお、『未刊雑俳資料』47-10に、「水の音」五十一編と、引札（四十二編・四十四編・五十六編・百四十四編）の翻刻が載る。

さて、「水の音」は、小本（一八糎×二二糎程度）で、十丁程度の小冊子である。半丁に二撰者の撰句十句を載せ、販売書店一覧や撰者各員録を備える。

書名は、初編の表紙に「軽水のおと、初編」（傍点は富田による）とあるので、「みずのおと」と読むことがわかる。なお、二編以降、表紙の表記は、「軽水の音、二編」と、「おと」が「音」の表記にかわる。角書は四十編まで「狂俳」である。その後、四十一編から「軽水の音 四十一編」と「単俳」と角書するようになり、その後、さらに変遷していく。

なお、四十編は表紙・見返し・奥付の表記が特異である。表紙は「軽水乃音叢誌、四拾編」とあり、奥付（後掲）から、松井又左衛門が編輯人に加わることが窺える。後掲する「撰者各員録」の人数が十三名から二十名に増え、更に、販売所も四十一編掲載分から三十二店に増えるから、角書だけでなく、販売所一覧や撰者各員録からも、この頃におこった変化を感じることができる。

見返しに定価の表記があり、初編から五編まで定価三銭、六編か

二

ら十編まで三銭五厘。十一編から四銭。五編刊行時にそれまでの五編をまとめた合本が五銭。価格は、現在の五百円くらいか。

ところで、「水の音」五編（明治十五年九月）序に、「七十四翁 水魚園」とあることから、水魚園は文化六（一八〇九）年生であることがわかる。「撰者各員録」に、「大曾根坂下町 水魚園耳毛」とあるので、嘉永四（一八五二）年は、四十三歳である。

この嘉永四年に、狂俳天狗を自称して、合同で自撰句集『狂俳天狗七部集』を刊行した七名の天狗たちの中に、同じ水魚園という庵名をもつ水魚園大凹がいた。その吟名録には、「宮町 水魚園大凹」（宮町は現在の中区錦三丁目・東区東桜一丁目に属する伝馬町通りに沿ったあたり）とある。

耳毛と大凹は、俳号も居所も異なっている。しかし、年をとると、耳の辺の毛が白く長く伸びる者がある。耳毛とは、そのような特徴的な毛が伸びてきたことから、長寿の意味をこめて名付けたのではなからうか。つまり、大凹が、明治になって転居し、「水の音」に参加する頃、耳毛に改号したのではないかと考えている。

また、「撰者各員録」をみると、小牧から名古屋へ出てきた暁光亭枝玉、熱田（名古屋市中津川（岐阜県）へ移住した稲本楼紫玉がいる。移住の本当の理由はわからないが、撰者としての活動場所をかえたとみると、それぞれの意気込みが感じられておもしろい。

凡例

一、翻刻にあたり、読解の便をはかって、次のように扱った。

1、濁点、句読点を施した。ただし、底本にあるものと、恣意に施したものとを区別していない。

2、異体字を含めて漢字は原則として通行字体に改めた。ただし、雅号と人名に使われた「涼」、「竜」と「龍」の別は、底本どおりとし、「齋」の類は「斎」に統一するなど例外もある。

3、慣用・誤用の漢字やかなづかいも、誤解のないと思われるところはそのまま残した。

4、校者の注は（ ）に入れ、本文中に加えた。または、*以下に記載した。

5、底本は、架蔵本をもとに、服部徳次郎氏蔵本・吉沢義夫氏蔵本・国立国会図書館蔵本・一宮市図書館蔵本で補った。

○「狂水の音」初編

(表紙)

狂水のおと 初編

(見返し)

水音舎月次集

定価三銭

狂水の音 初編

明治十五年五月廿日御届

同 年同月出版

編集兼出版人 梶原竹哉

名古屋区七小町百六十四番邸

(序)

くろがねはいやしけれども、こがねにまさる用あり。こゝに狂俳の冠句てふものの技ひくうして、くふ(食)たらねど、勸善懲悪の道をさとし、はた世情をよく穿て、童の耳にもふれやすく、おしえのはしともなりぬべし。さればわれらが鐘のあらくしき音も、時にあひて鈴はか鋭に動らんと有志の友をうながすにこそ。 其風述

○「狂水の音」二編

(表紙) *「おと」を「音」と表記。三十九編まで同じ(以下省略)。

狂水の音 二編

(見返し) *梶原竹哉が七小町(現在の東区)から宮町へ転居。五編まで、出版月の他は同じ。

水音舎月次集

定価三銭

狂水乃音一編

明治十五年五月廿日御届

同 年六月出版

編集兼出版人 梶原竹哉

名古屋区宮町巷丁目乙一番邸

(序)

行水の流れ久しくして、もとの水にあらず。此冠句ももと連俳より出て、水上はおなじ。されば正風の意味深長を慕ひ、清きながれをくみて、かたみに櫻を洗ふべく、しらべも濁さずば、おのづか

ら方円の器に随ひ、なほいやましにさかへん事をはかりて、魂あへる友どちつどひ、翁の一句をそのまゝ水のおとゝは名づける。

米園しるす

○「蛙水の音」三編

(見返し) * 出版月は七月。他は二編に同じ。省略。

(序)

花になく鶯、水にすむ蛙の声をきけば、いきとしいけるもの、いづれか歌を読ざりける。我風教の雑俳もつとめ励みて怠らず。かの深瀉の下ゆく水の音きけば、むすばぬそでもすゞしかりけりなどいふ古歌もたゞ水音の絶さぬことをたのしむならん。河海は細流を掬はずといふ心、もしくは温故知新の趣意にて筆すさびに請なければ退之の奥蘊をいさゝ穿つも何の難きやあらむなど評するものは

九華(桑名) 町の半日庵

○「蛙水の音」四編

(見返し) * 出版月は八月。他は二編に同じ。省略。

(序)

水の音の高吟は元禄のむかしとふりぬれども、流れの末はあるらしく、此冠句にももてはやし、はや口養の梓に能任せて、世に行るゝこそおかしけれ。さればこの道にこゝろざし浅からぬ人々のあやまちて古池に飛込とも、水かけ論の愁なく、また他の嘲り笑をかもす

も、蛙の躰たるためしなれば、したしくよけて心を洗ふにしかじと、かの酔しては水底に眠る。

知章の徒をたのむ 酒の家計樽 しるす

○「蛙水の音」五編

(見返し) * 出版月は九月。他は二編に同じ。省略。

(序)

豆腐に鏝、糠に釘うち、人によってきくならむ。かたちのなきも有やうに啞を上手につくものは三代唾の罪もあり。はた阿鼻焔熱の苦をうくとも、彼朱樹翁(士朗)の言葉もあれば狂句の底意を失わずたのしみ給へと老婆心をのぶるものは 七十四翁

水魚園

○「蛙水の音」六編

(見返し) * 出版の御届日は、十月廿五日。出版月は十一月。定価は三銭五厘に値上り。十編まで、出版月の他は同じ。

水音舎月次集 定価三銭五厘

蟹水乃音 六編

明治十五年十月廿五日御届

編集兼出版人 梶原竹哉

同 年十一月出版

名古屋区宮町壱丁目乙一番邸

(序)

我社の狂俳は日々に末広がり。作意ははしがりをしるす、本舞台にう

つり、太朗冠者の身の上より大名の行ひまでつゞりたのしむ。大御代のひかりのどけき春日山、人も冠句をさすならむ。我も冠句をさそふよと、たがひにはげみ競はむことをあふぎ、もとむるものは

貫々居

○「狂水の音」七編

（見返し） * 出版月は十二月。他は六編に同じ。省略。

（序）

日々新として又新なる句作、頬を打て感称し、腹をかゝへるおかしみも、打越し・去嫌ひの遠閑もなく、心の欲する所にしたがひて矩を蹴れば、杓子定規のそしりもまぬがれがたし。されば、月々の発兌を閲し、こゝろに練磨すればおのづから正しき風致に入るの道、庶からん。

東園而曉 述

○「狂水の音」八編

（見返し） * 出版年月は十六年一月。他は六編に同じ。省略。

（序）

冠句の道たるや、月・ゆき・花は更なり。雅にまれ俗にまれ、わづかの文字にていひたらし、ことなる風韻のあるものなれば、人に親睦するの妙技ともいひつべきか。されば水の音の巻を文机に置いて、諷詠の龜鑑とし、おもふどち、此道を打かたらはんに、君子の

交りは淡しくして水の如しといへるがごとくあらまほしきことになむ。

佳楽

○「狂水の音」九編

（見返し） * 出版年月は十六年二月。他は六編に同じ。省略。

（序）

水のこゝろこりて玉となれるにひとしく、水の音の月なみ集も、はや九つの編を重ねて世にひろくかゞやきぬ。これ全社中の研究に出し、いはをなれば、猶したしみの談としからぬ、意を画て、序詞の債ひと寄る事しかり。

千代の家述

○「狂水の音」十編

（見返し） * 出版年月は十六年三月。他は六編に同じ。省略。

（序）

珉（岷）江の碩礫、我足に入りて底なしと言るが如く、水の音の編集も人々の清吟、月次ミつもりて十編の広きに至りぬ。予も此流に浴して、耳目を濯ぎ、拙志を述て、はじかきのまねびとするになん。

子日庵しるす

○「軽水の音」十一編

(見返し) * 出版の御届日は、十六年三月廿七日。出版月は四月。定価は四銭に値上り。十五編まで、出版月の他は同じ。

水音舎月次集

定価四銭

軽水乃音 十一編

明治十六年三月廿七日御届

編集兼出版人 梶原竹哉

同 年四月出版

名古屋区宮町壱丁目乙一番邸

(序)

水の音の侘意は古池のふるきをしたひ、句調は変化究りなきも、翁の遺語の三ツにとゞまり、流行はまたことにして、遠く東の都に聞え、人々の技吟ありしより、かくて盛にはなりぬ。されば社中の本懐こゝにつくせりとよろこばしきに、とりあへず秃筆とりて書つくるは、みづのと未の春の頃、硯の水もぬるむ日にぞ有ける。

錦帯軒五橋述

○「軽水の音」十二編

(見返し) * 出版月は五月。他は十一編に同じ。省略。

(序)

いくぞたび、かき濁しても澄かへる、水やみくにのこゝろとは、世に名だゝる秀逸にして、我社中の臭気を濯ぐ潁川なりけり。いまや十二回の編輯なりし筆くさのしげきにしげるそが中に猶も根ざしが清からん数吟をこそ接かはしけれ

十六年未春

稲本楼主人しるす

六

○「軽水の音」十三編

(見返し) * 出版月は六月。他は十一編に同じ。省略。

(序は未見。欠丁か)

○「軽水の音」十四編

(見返し) * 出版月は七月。他は十一編に同じ。省略。

(序)

水の音の集、名興りたるは、祖翁の心裏を尊み、社員ごぞりて月次に集巻なれりける。されば句作あらん、つどくたゞしき風にしみたまへと、まごゝろをのぶるものは

よしかな

○「軽水の音」十五編

(見返し) * 出版月は八月。他は十一編に同じ。省略。

(序)

ただしき風のひかり世にかゞきて、人みな仰ぎ尊めり。そも俳諧家訓の三条は、我かぶり句のうへにもかくることなければ、友どちきそふ心より、元禄のむかしをしたひ、奥の細道わけ入て、さび・しほりを味はへば、雉兔・蒨蕘の往かふ途に迷ふことも翁の杖に導れ

て、終に蕉門の格に入らむ事をねがふにこそ

史観 誌

*雉兔（チト）は、雉と兔を捕える獵師。蕪蕪（スウギョウ）は、草刈りと木こり。

○「狂水の音」十六編

（見返し） * 出版の御届日は、十六年八月廿四日。出版月は九月。

十九編まで、出版月の他は同じ。

水音舎月次集

定価四銭

狂水乃音 十六編

明治十六年八月廿四日御届

編集兼出版人 梶原竹哉

同 年九月出版

名古屋区宮町壱丁目乙一番邸

（序）

禹王は水を埋めてあまねく世に崇らる。祖翁は水の音の一句に正風一派のさとりをひらき、門下の人々を諭し給ふ。其風韻を嗣で、月次集の水の音も滔々としてわたくしなれば、たま〜さぐれ江のさゝ濁りをこし、心えずもいつしか清く澄わたりて流るゝ音のひゞきに応じ、ひむがしの都に遠く樋をわたして、かたみに酌かわすことゝはなりぬ。

柳圃書

○「狂水の音」十七編から四十編までの序は未見。

○「狂水乃音叢誌 四拾編」

（見返し）

水音杜月次集

明治十八年九月発行

一 老冊定価金四銭

一 郵便にて通送の分は別に郵税壹銭申受事

○「狂水の音」四十一編

（表紙） * 角書が「単俳」にかわる。四十三編まで。

狂水の音 四十一編

（見返し） * 角書が「俳諧単句」に、誌名の表記「水乃音」が「水音」にかわる。

水音杜月次集

定価金四銭

狂水乃音

明治十八年十月発行

編輯人

愛知熱田旗屋町

松井又左衛門

持主兼印刷人

全名古屋宮町壱丁目

梶原竹哉

（序）

諸言

俳諧といふは、既に先哲の言葉の如く滑稽なり。安永の頃、愛知に始る俳句を狂俳冠句と言ひ、或は前句と呼び来りしを、近頃、雑俳と称て、此道をたしむもの、尾・濃・三に満々たり。是入るに正し

き規矩なく、仮名の違ひ・句作の誤り等を等閑にする。判者のつとめ薄きが故ならん。四季の景物・神祇・恋・雑・人倫の七情を述るに、何ぞ詩歌・連俳に異ならん乎。さうえる蕉門の流れを汲む水の音なれば、俳諧連句に対して単句とは更ぬ。一句毎に心詞の納る物なればなり。斯て陣に式法をも設け撰者の研究を促し、俳士の智識を開かんと、其はし書をする事ばかり。

明治十八年九月

米園 しろす

【付】「軽水の音」初編から四十一編までの販売書店一覧(四十編は奥付)と「撰者各員録」

〈販売書店一覧〉

◎初編・二編(二十三店)

名古屋 各書林
 同玉屋町 東壁堂
 同古渡町 清蘭堂
 同門前町 滑稽社
 同巾下 皓月堂
 宮 紙屋清蔵
 三州岡崎 伊藤文造
 同挙母 文会堂
 同豊橋 豊川堂
 同牛久保 大黒屋萬助

三州刈谷 岡本権三郎
 同榎前 本屋為助
 岐阜 成美堂
 小牧 薬
 知多郡大野 本屋新造
 同半田 西川六左衛門
 同 小栗太郎兵衛
 津島 文整堂
 蟹江 本屋善助
 一ノ宮 本屋熊吉

同 喜多屋徳左衛門
 同西尾 本屋重兵衛
 同 出版人 梶原竹哉
 同 発売人 慶雲堂東平
 ◎三編から三十五編(内、二十編〜二十六編・二十八編〜三十二編まで未見)(二十二店)

名古屋 各書林
 同玉屋町 東壁堂
 同鉄砲町 慶雲堂東平
 同古渡町 清蘭堂
 同巾下 皓月堂
 宮 紙屋清蔵
 三州岡崎 伊藤文造
 同挙母 文会堂
 同豊橋 豊川堂
 同牛久保 大黒屋萬助
 同 喜多屋徳左衛門
 同西尾 本屋重兵衛
 三州刈谷 岡本権三郎
 同榎前 本屋為助
 岐阜 成美堂
 小牧 薬
 知多郡大野 本屋新造
 同半田 西川六左衛門
 同 小栗太郎兵衛
 津島 文整堂
 蟹江 本屋善助
 一ノ宮 本屋熊吉
 出版人 淇水堂竹哉
 同 淇水堂竹哉

*三編では、「名古屋門前町 滑稽社」が抜け、二十二店となる。十九編まで同じ。他に、慶雲堂東平の所在地が「同(名古屋)鉄砲町」と記載され、「出版人 梶原竹哉」が「出版人 淇水堂竹哉」(名古屋区宮町壱丁目)と表記される。

◎三十六編・三十九編（欠丁）

◎四十編（奥付に七店。販売書店一覧を欠く）

（奥付）

持主兼印刷人 名古屋宮町一丁目 梶原竹哉
 編輯人 熱田旗屋町 松井又左衛門
 発行所 宮町一丁目 淇水堂
 売捌所 名古屋区玉屋町 片野東四郎

同 鉄砲町 慶雲堂
 同 玉屋町 鬼頭平兵衛
 同 本町 百架堂吉三郎
 同 鉄砲町 川瀬代助
 同 鉄砲町 梶田勘助
 同 古渡町 清蘭堂

◎四十一編（三十二店。店名は省略されている。例えば、「名古屋玉屋町 永東」の「永東」は、「永楽屋（東壁堂）片野東四郎」の略）

売捌所 小牧 薬 三州新城 鈴木武
 名古屋玉屋町 永東 稲葉 芳春亭 同 岡崎 本文
 同 鉄砲町 萬東 知多大野 同 福岡 雲母堂
 同 玉屋町 菱平 同 半田 小栗 濃州岐阜 成美堂
 同 同 永吉 同 同 郁文堂 同 多治見 駒周

同 本町 川代 三州拳母 文会堂 知立 淡月堂代理店
 同 同 東雲堂 同 西尾 開益堂 大捌
 同 鉄砲町 秋源 同 同 川富 岡崎伝馬町 淡月堂
 一ノ宮 本熊 同 牛久保 大万 名古屋古渡町 清蘭堂
 蟹江 本善 同 宝飯国府 平茂 名古屋区宮町一丁目
 稲置 越平 同 豊橋 三星堂 発行所 淇水堂
 同 星光堂 同 刈谷 岡権

〈撰者各員録〉は三編から付される。

◎三編（十六名）

名古屋区彌宜町五丁目 旭向亭鬼松 東春日井郡小牧 暁光亭枝玉
 熱田伝馬町 稲本楼紫玉 同 大曾根坂下町 旭清軒芝鶴
 名古屋区長島町五丁目 千代の家緑 熱田旗屋町 米園通賀
 熱田神戸町 錦帯軒五橋 同 同 涼川居其風
 愛知郡野田村 松樹亭佳楽 名古屋区桑名町四丁目 半日庵市有
 名古屋区桑名町二丁目 子日庵松山 同 東春日井郡小牧 雲月庵玉川
 西枇杷島問屋町 東園而暁 名古屋区鶴重町三丁目 貫々居一斎
 名古屋区長島町四丁目 酒の家計樽

◎四編・五編（十六名。三編と人物・配列は同じ。但し、酒の家計樽が長島町四丁目から菅原町二丁目に移居。省略）

◎六編から十三編（十八名。中島郡の芳春亭史観と花月楼よし哉が

参加)

中島郡稲葉駅	芳春亭史観	中島郡二俣村	花月楼よし哉
名古屋区瀬戸町五丁目	旭向亭鬼松	東春日井郡小牧	暁光亭枝玉
熱田伝馬町	稲本楼紫玉	同	旭清軒芝鶴
名古屋区長島町五丁目	千代の家緑	大曾根坂下町	水魚園耳毛
熱田神戸町	錦帯軒五橋	熱田旗屋町	米園通賀
愛知郡野田村	松樹亭佳楽	名古屋区桑名町四丁目	涼川居其風
名古屋区桑名町二丁目	子日庵松山	同	半日庵市有
西枇杷島問屋町	東園而暁	東春日井郡小牧	雲月庵玉川
名古屋区菅原町二丁目	酒の家計樽	名古屋区鶴重町三丁目	貫々居一斎

◎十四編から十五編(二十名)。小牧の不瞬亭紀昌と「薬」亭軽香が参加。暁光亭枝玉が小牧から名古屋へ移住)

名古屋区菅原町二丁目 酒の家計樽 一 名古屋区鶴重町三丁目 貫々居一斎

◎十六編から十九編・三十七編(十四名)。名古屋の子日庵松山が稚松に改号か。同 錦帯軒五橋と暁光亭枝玉(十三編まで、小牧在住)、小牧の不瞬亭紀昌・「薬」亭軽香・旭清軒芝鶴・雲月庵玉川が不参加)

中島郡稲葉駅	芳春亭史観	西枇杷島問屋町	東園而暁
中島郡二俣村	花月楼よし哉	名古屋区菅原町二丁目	酒の家計樽
名古屋区瀬戸町五丁目	旭向亭鬼松	大曾根坂下町	水魚園耳毛
熱田伝馬町	稲本楼紫玉	熱田旗屋町	米園通賀
名古屋区長島町五丁目	千代の家緑	名古屋区桑名町四丁目	涼川居其風
愛知郡野田村	松樹亭佳楽	同	半日庵市有
名古屋区桑名町二丁目	子日庵稚松	名古屋区鶴重町三丁目	貫々居一斎

◎三十三編から三十五編(十三名)。十六編の板面から東園而暁を削除。省略)

◎三十六編・三十九編(欠丁)

◎四十編・四十一編(二十名)。十六編の十四名の内、名古屋の旭向亭鬼松と西枇杷島の東園而暁が不参加。熱田の錦帯軒五橋が復婦。新たに名古屋の玉斎寿・幽溪舍虎友・春雨亭柳圃、知多の周清堂一朝・棟々舎市楽、千種村の青柳亭玉光、中島郡の可笑園諸楽の七名

が参加。錦帯軒五橋が復帰。なお、稲本楼紫玉が中津川へ移住）

名古屋区東田町三丁目	玉斎寿	濃州中津川	稲本楼紫玉
知多郡加木屋村	周清堂二朝	熱田神戸町	錦帯軒五橋
同	棟々舎市楽	同	長島町五丁目
愛知郡千種村	青柳亭玉光	同	桑名町二丁目
中島郡五ツ家	可笑園諸楽	同	菅原町二丁目
名古屋区長島町三丁目	幽溪舎虎友	大曾根坂下町	酒の家計樽
同	浜町一丁目	熱田旗屋町	水魚園耳毛
中島郡稲葉駅	芳春亭史観	名古屋区桑名町四丁目	米園通賀
同	二俣村	同	涼川居其風
愛知郡野田村	花月楼よし哉	同	半日庵市有
	松樹亭佳楽	同	鶴重町三丁目
			貫々居一斎

注

- (1) 黄木宏行編「郷土新聞雑誌年表—明治時代—」（中部図書館学叢誌—2—1
一九六〇年九月）、服部鉦太郎著「写真図説明治の名古屋 世相編年事
典」（一九六八年 泰文堂）参照。
- (2) 中島古洞氏蔵。この発行年月日は落丁のため、302編が大正五年八月発行
とあることより、推測した。
- (3) 『尾張狂俳の研究』第三章（勉誠出版 二〇〇八年三月刊）参照。
- (4) 「名古屋『雅風教会規約』にみる教導職制度の影響」（『椋山国文学』33
二〇〇九年三月）に付した翻刻「雅風教会規約」の〇A「俳諧単句改良
緒言」（二九頁）参照。

付記

本稿は、椋山女学園大学 平成21年度学園研究費助成金（B）によ
る研究成果の一部である。
貴重な資料をご提供いただきました鈴木勝忠氏・服部徳次郎氏・吉
沢義夫氏、国立国会図書館・一宮市図書館には、心より謝意を表しま
す。

【著者略歴】

富田 和子（とみだ かずこ）
一九五九年 愛知県生まれ

所属・現職 椋山女学園大学 現代マネジメント学部 助手
最終学歴・学位 名古屋市立大学大学院・博士（人間文化）
所属学会 俳文学会・日本近世文学会など
専攻領域 日本文学（俳文学・児童文学）
主要論文他 『尾張狂俳の研究』（勉誠出版 二〇〇八年三月）
『俳文学大辞典』（角川書店 一九九五年）に「狂俳」
含め23項目を執筆担当